續々滕栗毛初編

上

へ 13
1164
49

特
門 遠 13
號 1164
卷 49-63

續々膝栗毛序

膝栗毛の赤馬八原
ひざくりげ　あかうま

ゆ門出せし続々
ゆもんで　つづ

ゆ和泉まつぬくちの童府ふこ所しゆ
いずみ　わらべ　ふこ　ところ

東海道中膝をはげて東海道を
とうかいどう　ひざ　とうかいどう

通りしるこしつ浦くく全部満て尾張
とおり　ぜんぶ　まんび　おわり

まで云ふ事を〻〻斗り其、糟粕の
　　ことつ　ことつ　そこ　かす

売屋と云ふ人と書肆思ひ立て
江戸の山がけの評判を請ふ
人ごとに面白の面白てもあらば
補助さとぶる助々の人見もなれば
の耳小風と世間ひ
先輩の看版せしを選えてひき

いくばくふハと云ふる屋号
の跡付不出書と著しるぶ筆の
建場不息杖ぞの宿面助ふ
地傍歌七旅の恥たる私ども掛き拾て
三ヶ月つて考の事

十返舎一九志

孝行を
高麗
ゝ
ゝ
はしめ
なハ
高麗を
ハゝの孫の
かゆを
時宜

十返舎
一九

序文ハ。藤栗毛の馬にて。筆指子ハ書しれども。
此書稿中よりの仮。さ式ハ東都へ帰去せ。まで。
全部作りくさと。書肆涌泉堂きうに。其積々編と
雖るてんのとがく。後中の清秋方めづらしう狂バ。
両主が神田の八町堀ハ。こゝら店さまねれ。おとこだて。
こゝきさ後のちくしきこと。奥ある事ぞりと編を
て。一時の歴年とあるとあと。此上ハ。後行ハ思
こゝろもなるべし。打出追くまれは嗣んこと。ひさま
作ぎ後ふあ面

十返舎再記

續々藤栗毛初編

東都　十返舎一九著

人間生涯ハ旅ハひとしく。一休禅師ハ門松と一里塚
と云。されやうの駄賃本駄賃ハ。栗毛の駄賃
きのゆべ。売屋乃かゝ無体に追立てゝ行もあり。
迷もまの世ゝ仮の宿旅籠賃もそれ〳〵の過福ゝ。
故郷へ錦と勝る道者ハ。裸で道中をるものゝ。藤
追つく笑報神ハ。左郎兵衛駕嗅ゝ酒喰ゝとあれず。

一升の壺ハ一生の夢中作左馬で暮さのくぢかーも。
旅ハ道連世ハ情の拾ふ神あるく。思ひ出外さんざ茶
釜藥鑵と化る理で菊瓜唐茄子とけ形も浮世ハさぐ
まの中にも天道人を殺さぬといへども。まて活もせず。
死もせざど。流香も炷ず屁も知ぬハかの臆栗毛に名狐
ありまつ。弥次郎兵衛去多ハ其草刈着あり。永この
度中。空文小江戸へ帰りたる[illegible]が差出りて落出ありれば。
[illegible]あく古石ど[illegible]かく思ひ出ー。次第作ー神田の八町
堀ふひとり長家の左次兵衛と以ふ親父を便てふり迎るる
あの左次衛。近頃四國と廻り帰里さるが。其身猫ふまた
あるざれども女房を置去と有[illegible]より今ハひとり暮ハ
たまたバ尚今三人寄て文珠ハ智恵とふるひ出ーくらの
世帯目のこ算用ふーとく廻り番に飯さえ焚バ眼黒ハ鋤
ふ[illegible]きこと養豆の買食ー不断流ーとふ竹の皮の蒲
團ちきく。貧乏徳利の麻姿見ぬ目もあく何が高貴
とおもへど。濡手に衣ありれば樹ふ解ハ生る異

はきものなくなる清兵衛際あの商ひその時くさは賣物なくでも
ごぜれと稼ぐふつまて。弥次郎兵衛喜兵八も代地の小細工に
何角とあどつけてその世渡り。折節ハ小銭は立ぬるふ先
代頃その隣の明店とかりと幸ひいろまで居ゆもあまり
智恵あり。とそそこと借請ひき移りてふたり男同士は
破鍋に綴蓋牧子と定親の新世帯くらべ貧らくと
嘉れて氣散ーのくらしあり。いで其次ハ五月中旬
二人ぐらしふぐ徒く。敷よ喰ふる清ふき。ものとふ

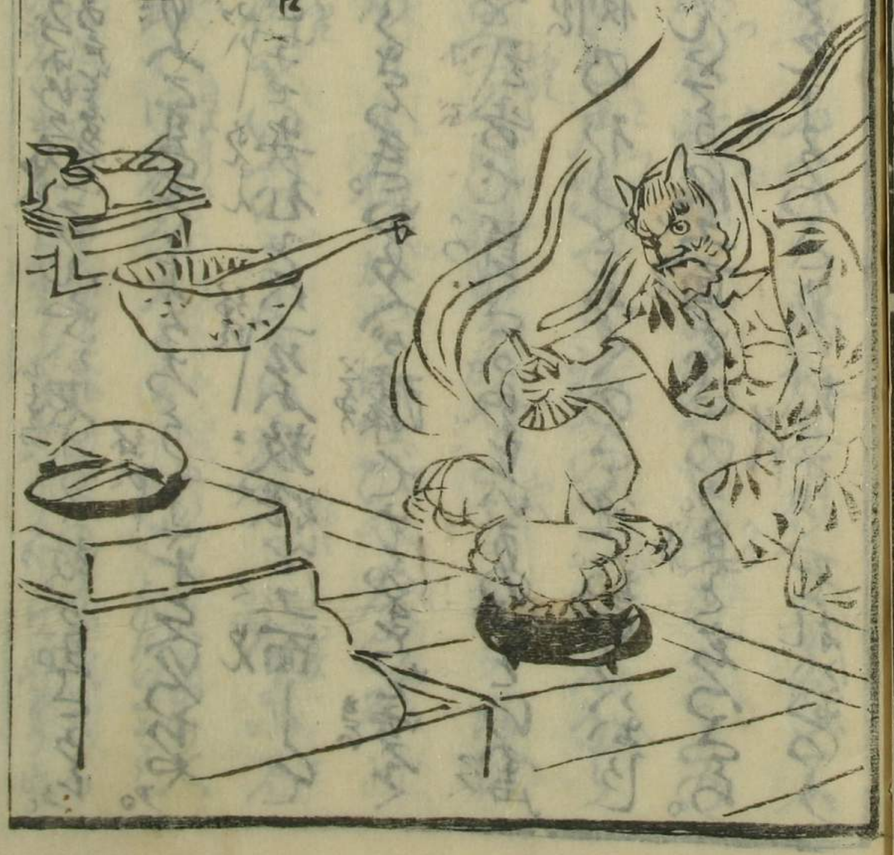
いまさ蚊帳の工面。出来ぞ。兵八背うう裏俵こしら
いぶ。そ。甚多も両眼とあとうあうう。ぶぐ張ちぱ書
たてあ面。ヨヤまぐ雇稲へうあ。今まで
隣に久ヨ吞でおふ。ふとありへきこごせ。ハ兵衛
圓者ごとのことぐ。わこそ見人祢笠まんぐでも
ちぐうう。ツイ五合ごれく。今まで吞でねぐ。あのち稲
あ拔隣は老親父のくちに。泊ておくハ。いそのぐ
二日ようあ人目が経。女ふかるとサア。そのはりで

衣うえ
ときみ
いさらひ
サ房
る
ひとるの
あるを
と
集ら
まう
ちを

九返舎
一八

きちまれ丑
ばちを
以ちへの
初手乃
松茶
くちを
吹ちの
うち者

金言舎
一室



福ハとをやせうト　なにかいゝかけ よこの戸をあけて　二人の客ハ悲しく数が多さうだ
おまへのおしさが。其上ハ二重がくゝりつけ　福助「イヤそれハよいおちやア。
おつれハ安心かものさ　三八「ナゼ安心と云ふ　福助「かの数攫と工面して
そりやさうとよ　お八「そんなことなさるき。お多ふくが攫でたまたまを喰ふ
ねこいふ。双六ハれかゝやと武者で貰ふがおまへといふあのぜにを出す
お志さがハア　ありさま例のわらしとふくのごふとおもつてハおとじ
かつさがそんなかつかんそうに工面ちとのうまと志ろさら。
こんなにいはざとをよろさめ　福助「イヤ　それハおつら

ひと重前のかやござりますふうハ福らまれへよふりやどぞふ
志て。ハアきかうへさ母衣数張とどこぞで借てきさの
ござか　福助「イヤそろぐでやでも戸塚でも福へのよ一枝んから
かんぞ。どんなかやざへ　福助「くびれあるかやざ　小八「十二首が福相
尻尾もある　小八「ヱヽともうも福へかやにくびやしつぽれ
あるハコそさそが福へ何といふのうまらわれへ　福助「ハゝゝ今の足
さるし。ドリやかやと釣て法寝なろう　ト　わらつかしいとあけて。ぞろぞろとひきはぢまる。
又月ののぼりにつけし紙の鯉ハ九尺ぞろり…これハ…のきき…あきなひさる…いつも又月のせつくまへ…外より

紙のこいとらのすれ・かやてうくあつくこうらくさせーぐ・ちうもんちぐひうそおさあらぐ。
はこい・うろぎめとあしと・ほそくらえのうへ・ひゑけくるまで・かやれうりに・あのこいは
うちくすりう・ほうつりのおひつき・ぐれバやぐそ九ぐろにあう・ぐれ
こいのうちうう・あーよりさきくすいこと・うらぐをまかいれて　ナント　大丑

むぐうこんで孫るつりハどぐ。智あるく　大丑ひぐ
うらぐ　ちんぐん　こい
鼓ぐ常分鯉のうちくそふ這入うけこ和ハ壁郎れ人魚といふ
めぐ。人魚れ獲と常るとぎ生ぎるといふことぐうら。長
やの流れ呼できて其いそらとあわさせようふ。ものうぐ側く
たぎと。ていてりやあめ。やしあふ只今おかやーぐやてれつくく
てんくと。ぎ毒てせらううこりやぐうといふかこまと人れ丑

せてつまるめうぎ家れ女どもに去れてハ外出ぐうるひ。
まやあやぐうさくれやくよりくおうもかやとおるひ
つうう。ひくふの長松ぐ忘れていうこ天狗れ面ぐうこにゆる。
顔く敷のくるさ跡うほいてハどあやう敷ぎとうらぐふ孫
ぎうで外出ぐうるのくうう。どうく新とくハまねぎうよ山面
とうぐ用て教かぐりとしてこうまるのゴトやいうりかちぐハ
ぐ出来こくひとぐ兄こうこれ内ハあんぐ。てんくやこいぐ
孫くいる向ふ島乃秋葉さあぐ軒まるとすぐごろう。あれハ

天狗はなをぐるりとまいて後の天狗は面
の皇柱ひこつのてきこうら大笑ト
らくのまう・えやいびきのスーてぜんごもちぶた・其のてう疫・わどあくおハとりたう
ぐうこふ疫ものまく・ぶ疫りいびこうろん・ちきりにうめくこく・耳ふり・火
色ハ弥次さんどうしさく イヤどふちさのうちう猛ゲ虫ゲかぶつ
てこそくらまう猛ハツレ足ふ。おあハあんまり意地ゲきさ猛
うら喰ふこのゴイヤのふあんざう仏指ゲるんどふぞ火弾
の引出ふある。九茅とろてくまハ邪ヶ広ふとろ。
それ茗ヶ湯もうさふやかるあハ保ハあハ鯉ざうぞくくと

水でも呑バいふふ。面とのむこのとはいぞ足ことゲ猛ト
ごとのひつとれおきて・ハとあんをうを弾ハ天狗めぐりのゆハ足のさう
うの・ちやゲまのちさとたきつけるハ弾ハ
さうさ今撲ゲさめとせうハ猛ト このうちわけ六ハのうねるハ弾ハ病ゲ
あるそふ。是うう猛うまもちあハ。ちぐに此あとで
茶を漏そふ。ヶ湯ゲぬるんざやろうどふざイヤのハ
いう猛ハ虫うかぶるのとよくく考と足さう。腹れうち
でぶるのぢやヶれハ。そうられそとでかぶるのざうう。そうと
ふとゆりて足さう。屋理こそ猛のうきふ。こんふ太きふ

やうがふさうまで。ほそぢうは、のてゐさきこハ、ふるうう。ソレ
ほを、ぜさうし、ゑ、あんざ、虱うこ、ふく、ふぎる。幟のおいの
がさく、やろうわ、ぎ、きさハそよいあ。まもく、ハ天狗。あれハ
こいといふめごろう。まけく、女ごめ、頼げあう。何ども
きいてやろうぜ、ぜどふーて、そて、まめとおま、とハ。
今うまあ。こいてんぐさあざろう、ナニ、おりーろくも、猛。
サア、茶うできさりの、紀あせく、けさりく、ハあうやあーや
おいつうひとうまくハ、ひろうさうもく、おきて、喰てもあ、ろ

イヤ、それぢやア、猛てハ、おろうま、猛く、こりヤ、おきまハ、あうめく、世
間でハかやとそづをふ。おいうのうやハ。ろうちうら。さづま、
出ふやア、かうわく、ひづうこの、このうちうそのさ、ぜちく、と、あのとうとうとう、ぜ、あのうちうのさ
ヨウ、法のでふ。おいうよりかやとも、そこうの行く、ひうけと
おのそくんぐ、ハイ、てんぐの面うぜこそ、ある、ウレくそれふ
ドウく、どこふく。ハイこれハ、ちうこ、ぜてやのかや
の皇、法を、踏、ぜて、ちまうとこ、そんぐこと、とうこ、こりヤ
皇がうりて、ちまうさ。それぢあ、ちうちうとふ、猛く

「綿屋 ナニかやにたおがれくとつてさ。見んごとも猫へもおかしいわや
猫へつ 竹ヨシひつまおつひて。それよりつぎつぎハ。出しおきこのうちのつの。ひろがひしみぬやおど。おりあわせれでこちめにちやづけめし。
まりふくゐちまひかるときに。何やらむすめの一ちふに。いさくさ匠まり。あとさめさえ尻。とへ一目ひりじきそらせとこてのたゞ家。ふうふげんくくとおへ出て
のきめるあをとえひぐきこまゐるに。あざ家のそくかどもが。こりさうとうち出る女房もきうぬ子げしても。わりま猫ハ。うけ出しく出さるに。ぞろぞろひこも出てひろかきれ
むうめかやでおうふ。あかしひろま出しまかから 「かとび いやさく。だりあくうおやぢめが気のはよい
あくらしおりやアがるく一ござきく。おむすのおちさん。マア
あらちくきてかきハト まらちくりもりこあべ。ぢぐぐくさあも。こりにさがり。車力ハ女ぼうおちよん「けさ匠
所の親父ごめハ。二階からおんころもろく。疝気ハおりしがござへう

のらさ。そこらかやゑいろ寐てくまこつとおふのら何
ござへいくめるか。戸棚へでものれてあるざらうと立せ
腹を最中。おとありれ騒ぎに。おやぢどの疝気へちち
一郷へ逃げておのそきてまつさ。おとびさん。マアどふしか
きんさのごスト いそとむすの「亭きのそくんおせへ。コヲヲの
むでハ子供ハ家へもれホア腰接れえおきるが朝起る
とえや。持旗も箱とさん出てひきちらし。ユリヤおれが
のご我のごと子どもわいてふ。その喧嘩もおきまりさ

うちでも朝まだき膳を洗ひ。芋ガ喰ふときうを
ぶるッイお膳とゑどもあるとと間遠て。その者是
お服ろうーさのとで。まうもふんと寄ぢ所いく
ニリャとんざるゑとーさと思ひまりこゞ。ナニけさ寄屋よ
洗さあうぢうろうとあるとく。佛さ是は仏壇を
あげよゑとーさこころと。うちでえつけて。ヤイひとうち
きあゞ。どうめくたてう。おかえりとうーて。そまこと
佛さあ〳〵あけあうとゝ。如仏様へ大ぢうがうも。まそ
ふきてう様へことをまると。は様あくいふう。ふさも須ガ
ふてく。ツイ蕗掘で。おそちとおかまと百遠さあめとそん
あふ。ぢうぢうようでる里まるこうう様へ。そふいふこあさも。
いうでや田舎は伯父はのきて時。膳を出ところく。箸
と指ふ本とうちぢく。ぜんへとりこ本をつけて出ーこと
ことゞあうさぢゃ様へう。どうしてうこ来でおきんまゞ
くうまるあめで。までーもあうう人うーと服パうれ様へ
ここうわへよ。あたもそんふいふこう様へ。このくらねの

ぞうちぶひハ世間ふいくらもあるなかのことゞとのあと。[illegible]
あつて腹とさてゝ。さおかるく仮をとうつもものゞ。世間に
いくらもあるめゞ。此なまめゞ。亭主へ向つてこゞこゝ
ゝやアゝる。おふ僕と者。きうく出てゝうあやアゞ是ことのひ
きまとつか。ホニおあくさんゞされ前ゞゞ。まゝ〜も廿年ゞゞう
跡までハ。こんがふ色も黒くハ。髪も黒〜ゝるさめゞ
ゝう。なのそこのうちと出さとろて。きんゞゝうのありもあるを
あくゞ。今ゞでハ。四五年あとの姿ひゞく。天窓ハ元ゞゝけを
て。色ハ黒くゞ。其上うちれ瘡ゞゝうのゝさ。鼻ハあんか
ふよゝろてゝうく曲る。それふ去年ゝう咽のあゝく。疼痛ゞ
ゝろまで出来ゝく。金玉のやうにぶらさゞゝてゝるうの姿。
今ゞ出さとろて。こゝゞゞふるめゞ。ホニ三年〜れ内ぢゃ。
年寄やゝふゞもゞゝうゞ。一月ゝのくせくと。氣とのむ
のハ是ひとゝ。お隣のおそめさんあゞハ。おさこさんとふ
ゞあるゝうよゝゞ。ま〜れおゞハ。邪ふる味噌にもまゝう
ひとゝゞゝるせくといゝちやアゞゞゝうません。イヤゞこゞる

そふさ。ゆきちの母でも。甚六へあの通りの後生ふあ。
やれにおさえ。年中血のくちで稼ぐうあきさう
ゆきちひとりふ世話をやるぞろう。きのへも吹て
くんかせく。大屋さんのおさんぐんぐ壁取とかりふ来
ゆきちもれ血の道ぞあが。おそとうハ糊二階の葛籠
おへまてあつさ。とん出てきてあげやうと。二つの
あつとろうぞあが。そふをとりうう甚六ぐあぐ
おそとうへ。ぐ強へがとくおそ。ぐふんてゆきうと。跡うら

のさく二階へあぐる其のろさ十二おそとうが葛籠ふ入て
あるのの。ゆきちが上板れ下ろう出て貸てやりこも知
ぞに。ふろうぐ二ろ。何とてある母ちとおりろさろあろ
ことう盈日中。ふ三章立てあぐいはませ。甚六を
まこまい。おてふ。常住ぐろくあるく世に子を抱つる
ろぞろうが上まで。何でもまきて。れ思ふ母ふいきそ
ぞに。それぐろう。もとびさん。仏ろも気でくろてろ。簡と
ゆきちのふせく。それぐろうとくあんまぐ。ふか。うちでまぐ

ゐんとうふ。わの症が治やときてゐるあさう。濃汁の出る
せうとをきるのがいやでくるから孫くるまで。亭主けことざ
とかりやァこそ。まふ中ゝかせ人ヤブ見限のそあざが。まづざ
早稲月ゝ大屋さま人店賃もやう投くせて。毎晩あま多ひと
のつて返ろくハ踏次のとこを破るやうふてくとまさーや氣れ
ぐごうう。大屋さえへいろを上まとはろておやをハふ。そまこ
おまさ。外国れるのまさが可毛をよこふとうまざ。牧
性もたろさやせんハふ。おめ人の五でままざかやあり

まろちうの家でハ。孫次さんが鰹とはろて孫やも。そ
家八ゆ。馬鹿をいふ。いめ人まのやろうやざヲヤきさハ
さん。こいをつるとハどふまるのざ。まこの家れるどもも。
どふも蚊のハふ孫人やうそれをそれハ。まハうさ
代藤の左次兵さんがあ人店を持さ時。かやう孫人ろて。
ゑ月九幟の鯉の中へをろさ孫て。大まうひをさことが
なろさが。大ろさ孫次さんのこいも。夫さろう孫ヲそまっ
そんあーりゝ先殺がおろさのざ。孫次さん。ゐんがおめ人が

隠しても。蓋産後光右まひつけさ迷あこと。其の
かやの経とうく出てく。皆さるへも見てうけやうう一そ右や
ぢうぢとてもいうみとやアぐうて。大きふもせいかこやうと。
其ようう。うぬうてんぐのめんを。出てくるがいまいうと
かやいどくいうさ。ぞれぐくトてんぐのめんと出てくりうぬうひと
耶ト蚊ふくうまいぬやうう。ふくうはいとをう。泳ぎさんハ。鯉は
たらのあうくむぐうまんぢ。ごぞくとねさくりあくハ。
とれぐくトあ一人ようがのこいとひき堂と紙ひくはうまあるまいまひき
うれつきとあくありうきさあきあーく。スうらいとあり魚う

きうううちにきいとねぞや。亭主ことを。腹さんぐ
ぐ。遊奏ぞやアグ川てく。ちりうそあふけうくと何とうち
やアぐるのぐ。猫屠のうぢ。ちうち脇を潜ぐむと。さてき
あぐぐぐ。ちぐふどこくあうとともうせやアグ王トかがうくつくつきそのに
ちると紙ひう雑ちりくあうくあうふぞぞ。さうきふくうまうとハさんへ
もいうく異見して。兎角ちうくうるハ猫屋かせくと
鋼得さ出て。今お向のおぐあさんと。ちうさんさんうもの

山の形
女の足乃
東窟舎
一河

上乃形
五返舎
半九

前へ滝云ふいまきなさる所ゞ…閻してのけかせへ
なイヤ(ぐんだ)まアしも今度(えと)ハ堪忍袋(かんにんぶくろ)れ緒(お)がきれさうぞとなさ
さるの法接拶(ごあいさつ)でも。金(きん)ゑんゑんま奈落(ならく)堪忍(かんにん)ぢすませねゑいう
と思(おも)つて踏透(ふまへ)しの馬蹄石(もちのせき)とゑるやうな顔(つら)をしやがつて
ほいの小歯(え)の掃除(さうじ)もせぬくちから。鼠色(ねづみいろ)れ涎(よだれ)をたらして
あやべ寒やがるが氣にくハねへ〔なんぞ〕それそんなよせきこと
なさるこたァねへ。そこゆへそのしがありやしまァおちちく
ちおぐりなせへなそれきさハゞハ。そのざまハなんざ。かふうさ

ねる面(つら)もさらつて。擢七(ぜんち)きやへお茶(ちや)でもあげねへ…
も喉(のど)がかわく。おちやハまつが枝(え)でのけやうト
(おかしなこのやかん ととさんちやがまの)
さをあけて(おちやん)〔引く〕まアいやだよ。きたの男ハ(がば)なぜく油虫(あぶらむし)
(きりさうがし)
でもねこれ久(おちよん)〔チニサ〕茶釜(ちやがま)のふたをとらさ。中からねつとり人(ひと)
の足(あし)が出(いだ)さうき〔十二〕ちやがまれ中(まつ)からのしが出(で)さとハ。つりや
だれがあしと全(ぜん)ておいらのぞきこハまよへのおしかヽ〔イヤ〕
おいらの足(あし)ハ。二本(ふたへ)なかつこてれるあと〔それ〕おれやがれが
おしどドレくト立てあ。ちやがまのぞき。出足出て
中から。あかいひかりと。それそとれ笠〔ハくヮ〕きさまへござい

くらのうちゝ紀て。茶を入て。せうとゝまのつさ面。ちや袋が
あれ孫へで。そこにあつさその豆袋と。ユリヤヲ拵のくぎえ
ひつけておいて。茶ぶくろのおちてゐるつごと。落間ふ
間遠て。その豆袋へちやと入て。蓋こく蓋このゝ〳〵ヨコ蓋び
るなぢやヲ孫へ。道理こそ。おいらゲきこのふそいて。ぎこ。び
がゝくゝ孫へと思ふさふ。けれ男ハ坪も孫へ。あの古豆袋
の釋をくさろてゐるあと。蓋出てけさ。おれ茶漬
とくゝ蓋ヲゞろさ。ゐくまゝの間殺めご。ふおとゲ面

ゐハおくるヲハかゝう孫へ。サヲ出て。そいけくゝさろさ入ゝ出てくく
うせおを。ヨワウト義知のさけゞ。おいうゲ出ていくゐハ
遠作ハ孫へ。ヤヲよいとこか。コレきさん結かせ。ユウ孫
さん。何も是しきれるれ。そふ墨桐づ色をいふこと
孫へ。ヲも爰ふ居合せて氣のどゞ。ユリヤヲ接殺
ごヲ簡してやりかせ。そんかゝ。おめくれいひかきるこ
うゝ。志ふくひヲ簡を蓋せうゝ其暫ゝ。おとびさんのと
も。ヲ是ゲ孫云さるゝゝ。是限ふを図てくんかきうどゝご

五六の
おぢ

ホニ おとびさんハ。お櫓とおかさと同遠るきさハさんハ
茶代袋と豆袋と五遠る両方おんなじ。おごゝふそ
簡ゞ出来て。ゝぞさいおや祖ゝ久ゝ志ゝ今度ゝゝゝと
ゝけて。おこびもうあつぱ茶袋おわりとうつさねは
ゆう。きさこうも祖後。志ゝ志ゝてもおかゝ志ゝあど茶を
入まてちやゞまれあくゝ志ゝこゝねもうふもるゞよん
ナニ おかゝとゞ茶ゝ全の中へ這入あ久ゝイヤおうゝ志ゝゞゝ
祖へ豆袋れゝよ。おうゞおとびも。おゝ志ゝとおかゝとうつ

せハ。ゝの多ハ祖へあゝ。も櫓へうゝ志ゝさあゞうゝまでもいう
ゞおかゝのゝ。ナニトおうゝさゞ祖理ちやゝあるめゝそんあう
こまうゝ。服ハおかまへうゝそあう。茶ハこびゝへ入ゝ志ゝて黄の
ゝ孫ゝそれゝく。そふゝさゝと豆ゞ袋ちゞゝへハ祖ゝコリゃゝ祖ゞさん。
お世話ふあり。ゆゝさゝおゝこありのおゞわさんも。おちよんさん
も。有ゞゝふあゞうゝやゝとハイさゝあうゝあゝトゝゝゝく歩くゆゝくゝ
ゞけゝうゝち。祖ゝゝゝもゞゝくゝゝゝとゝの祖ゝ
あゝゝ。これゝゝさゝくゝゝちまひて
男ゞ。志ゝ茶ゞくうゝと豆袋の召遠ゝ葉ひふまゞと

おいらがおあつらへ申して。向かれいきぐさつと流しまさ。謀まし
とふだ〽イヤ此ふのおかみも。おうしい事じやァ孫兵衛へらく
おかみさんより　おまへの顔　いきぐさきなれバこそ
丸めおとして　も　飯櫃形なり
孫兵衛ハ主人の言葉きこへバ。ふざいくまるできよふある女。これからのゆくゑの。
むしくのまさに八まへうりがぶどをとうらへ。左次兵衛にうらせする
なれバ。ふたりハそれ〳〵のさくいくまことをとりいって。どうしても。せいすと
こと。くら孫バひとりどきことをとする女あり。まやその日もくまうり[illegible]
さいくをまうまひとく。孫まよくくひまうまひ〽コレハァ。ちくとあけさとひ[illegible]
すところ。かとぐちにせんかのこ[illegible]
為には。お隣の左次兵衛さんアとけへいろさァの〽ト[illegible]
[illegible]
[illegible]ありのとせあり。きのふ左次兵衛をころねて。ちにさそつ。こぞつ[illegible]
ぬへゆきましたが。今かくりて見れバ。左次兵衛みをとにもく。かどにもまあてあるぬへ。ゆく
孫兵衛のくるまでおりとありで〔孫兵衛〕〽おとありでハさつき山の奥へいくといつて出
づきしるあり
かさんとうまづこなりかさる孫兵衛のさ。それハおかみへハ
いさありけれハ。お客が。アこちへやありあせへ〽〔とせ〕まんさうゆる
さんせきまし。ゑしなかハハア。芝の御へいろく尋ねと
こサ主道孫兵へで。魂消まてさァの〔孫兵衛〕〽アこちへあんなか
せへ。ヲヽハ田舎で隣でお馴染の方のござる。何も遠慮へハ
いら孫兵衛左次兵衛さんハいつも山の奥へいくと噂がおまへて

噺によると。はつちん泊りなさるもあるからてナゆつくりとそ
て待かせへ。是で。夜食ハ。どふぞまだかうきごとハ茶つけ
でもあげ様へ　卜あいそうよく出る。孫次郎が此せふ。きうあう奥へ入り。次「ネ三何へ
きさ八もそのところあれば・ふとくうそ
かくとても茶漬ふ志よふが迚もことに孫次さん志つかりく
喜多変ふして八どふぞ「ナニハア　よしくれへくもおきなりま孫へ
「弥次てもちよろとそふりてくるから　卜弥次と二本出して見せるに二せんそふなそ
ととゆへきさ八ところへ　北「サア　あつところちへよりかせへおめへおつそ
慈悲とおしゐるかさ。かふいくらになりかさる「ごぜ「よし申此年で

十八さアの「読どうして十八。饅頭なさるか。喜多生めとそえらる
孫へ　卜此うちまきさ八くうて「次孫次さん。何がとてえられねへ「読イヤ出まんぢう
ふそるが。とてえる孫へと此ふるよ「次十二まんぢうことが。ぞおか
志つかりくふ見る。そふのなくことのやとおや孫へ「読やよ
「次そうおんぐり。お皇勇アるる孫へ「読イヤ今たまる。のよ姉さん
「ゆれハアなるなさく。とあまんぢう。此饅頭出ろそうちへなさそふ。此男が
さ銭入。ちよろまつて見せるのが。どうこそ八虎此かき
「次コレぞとおし出「読おんでもあいとよ。イヤカタリく「ごぜ「ヤレハア此女志あき

はなをさらせるのぢやア〽ト此内へきこえると〽サアく姉さん。まんぢうでも
猿人蕎麦がきさ。遠慮ハ好う猿人ちあがりなせへ〽コリヤハア
かいふ法造作ぢやア〽えとあがりなせへ。ときに此左次兵衛
さぬハ。なぜおそへ〽コゞが賣ねへ門番が〽コレゞくおやまるハ。
ユウ姉さん。おいらも。左次兵衛さんの世話になつたさ
あのごろう。何も気づかひなし。今夜の左次兵衛さんが帰り
なさるなら。おめへ泊りなせへ。座敷へも男もめも。させる
る。おやア猿人が〽そのかはり。蚊に喰れるとさア うけあいだ